

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02452

研究課題名（和文）「遊びの質」を高める園文化に関するエスノメソドロジー研究

研究課題名（英文）An ethnomethodological study on the culture of childcare facilities and its effect on the quality of play

研究代表者

松永 愛子（Matsunaga, Aiko）

目白大学・人間学部・准教授

研究者番号：30461916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化をとらえるのに適したエスノメソドロジー法により、“40年間教師主導の教授学習法を採ってきたが、遊び中心の保育に転換するH園の5年間の過程”を明らかにすることとした。これにより、H園における「遊びの質」の発達過程（初期は「子どもの自己決定」、中期は「子どもの興味の継続」、後期は「保育者と子ども/子ども同士の相互作用」という言葉が遊びの実態と結びついていた）、「遊びの質」を高める研修内容、「遊びの質」を示す保育実践の記述方法（ネットワーク分析、ダッシュボード型記録案等）を示した。これにより、日本の保育施設に、「園文化」を自覚し改善するために参考となる道筋を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本には、遊びを中心とした保育方法や教師主導型保育方法など、様々な方法をとる園がある。いずれの保育者も、子どもの遊びを大事にしていると考えているが、「遊び」という言葉が指す遊びの実態は、園文化（同僚関係、研修内容、保育記録方法、保護者対応等における人々の相互作用によって生み出される価値）の影響を受けて異なっている。

保育者には、園文化を自覚化し改善し「遊びの質」を高める力が求められる。本研究では、保育方法の転換を目指すH園のエスノメソドロジーによる事例研究により「遊びの質」を高める過程、障害、その乗り越え方等について示し、「園文化」改善を目指す他園にとって参考となる道筋を示した。

研究成果の概要（英文）：The present study aims to analyze “the five-year period in which childcare facility ‘H’ transitioned to play-centered childcare after using a teacher-led method for 40 years.” This study used an ethnomethodology approach as it was deemed suitable for studying “culture.” As a result, we clarified descriptive methods of childcare practice that enable comparisons of: (1) developmental processes in the quality of play, (2) training contents that can increase the quality of play, (3) the quality of play itself. Thus, through this study we demonstrated a system that Japan’s childcare facilities can use as reference in helping childcare professionals become individually aware of the “facility culture” so that they can make the desired improvements.

研究分野：保育方法学

キーワード：エスノグラフィー アクションリサーチ ネットワーク分析 ダッシュボード型記録 遊びの質 園文化 遊びを中心とした保育 保育者研修 ネットワーク分析

### 1. 研究開始当初の背景

近年、国の保育の規制緩和により、園の運営体制が変化し、子どもの育ちが損なわれるのではないかと懸念されている。発達心理学の知見では、子どもの育ちには、遊びが重要とされている。そのため本研究は、幼児の発達を促す「遊びの質」を確保できる園条件を明らかにした。

現状、幼稚園教育要領には、「遊びの質」を確保するための視点が示されているが、その言葉の解釈は保育者によって大きく異なる。なぜなら保育者が「遊びの質」を判断する際、「園文化」（同僚関係、事例検討会内容、研修内容、保育記録方法、保護者対応等における人々の相互作用の中で生み出される価値観）の影響を無意識に受けているからである。「園文化」は、可視化・言語化が難しく「遊びの質」は、今まで十分に研究されてこなかった。そこで、本研究では、「遊びの質」を高める「園文化」とはどのようなものか明らかにすることとした。

### 2. 研究の目的

本研究は、文化をとらえるのに適したエスノメソドロジー法により、“40年間教師主導の教授学習法を採ってきたが、遊び中心の保育に転換するH園の5年間の過程”を追うこととした。これにより、①「遊びの質」の発達過程、②「遊びの質」を高める研修内容、③保育実践を比較可能にする記述方法を明らかにすることとした。これにより、日本の園に、「園文化」を自覚し改善するために参考となる道筋を示すとともに、保育のレベルの維持・向上に寄与することを目指した。

### 3. 研究の方法

#### (1) エスノメソドロジー法

エスノメソドロジー法の一部であるアクションリサーチ法により、エスノグラフィー（事例研究をもとにした報告書）の作成を行った。研究者松永は、保育者からの要請に応じて園内研修やアドバイスを行う存在として参加した。これは、研究者自身が、園の変化の過程に積極的に貢献しつつ、「園文化」の改善を目指す他園にとっても参考となる研究成果をあげられる方法である。

#### (2) 収集データ

H園の取り組みについて、①実践事例の映像、②保育者による保育記録、③保育者へのインタビュー、④保育者同士の保育カンファレンス内容のメモをデータとして収集した。また、⑤フィールドノートに園に観察、園内研修講師を行う、また様々な場面で園関係者と関わりを持ったたびに、松永自身の考え、疑問、感じたことをメモした。これは、研究期間におけるエスノグラフィー（松永）自身の視点の偏りや変化を自覚化し、これらの主観性の変遷をも自覚的に織り込んだエスノグラフィーを作成するために役立った。

#### (3) 研究対象の選定

データ収集は、毎年、5歳児クラスを中心に行った。幼児教育の成果が表れるのは最終学年である5歳と考えられるためである。5歳児クラスは、1学年3学年あり、毎年担任は変更されるため同一人物でないが、2018年はA先生、2019年は、2018年時にA先生の副担任をされていたB先生、2020年は、2019年のB先生のクラスで合同保育をしていたC先生、というようにつながりのあるクラスを研究対象とした。

年度	担任	選任理由
2018	5歳担任：A先生	研究者からの推薦
2019	5歳担任：B先生	2018年時、A先生クラスの副担任
2020	5歳担任：C先生	2019年時、B先生クラスと合同保育の4歳担任
2021	5歳担任：D先生	2021年時、5歳担任中、遊び保育経験最長の先生
2022	5歳担任：C先生、D先生 4歳担任：E先生	2020年、2021年に収集しきれなかったデータのフォローアップを実施

#### (4) 倫理的配慮

目白大学「人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」の審査を経て目白大学学長より承認を得た。

### 4. 研究成果

#### (1) 保育者の葛藤と乗り越え方の段階に関するエスノグラフィーの作成

H園におけるエスノメソドロロジー法によるフィールドワークを行った。保育者の保育記録、保育者のインタビュー、研究者による映像記録データ、フィールドノーツ等から、保育の変換過程において保育者が子どもの「主体性」という「言葉」と子どもの遊びの「実態」をどのように結びつけ、援助を行うのか分析した。その結果、保育者は、初期は子どもの主体性を「子どもの自己決定」と、中期は「子どもの興味の継続」と、後期は「保育者と子ども/子ども同士の相互作用」に見出しており、援助方法に影響を与えていた。遊びの変換過程は今なお進行中であり、未解決の課題も多い。特に、変換過程における保育者の学びを、変換過程を経験していない若手保育者にどのように伝えるのかについては大きな課題となっている。しかし、園の全体の方向性として、「保育者と子ども/子ども同士の相互作用」を重視する保育方法が定着しつつあるといえる現状がある。詳細は、「小川博久保育・教育理論集成（ななみ書房）」に掲載した。

#### (2) K児の成長を追った事例研究の遂行

H園における研究の4年目の時点における、子どもの遊びの質を明らかにした。園の変換過程にともない、子どもの遊びが変わってきた歴史を踏まえつつ、4歳K児の1学期間の育ちに注目をして、担任による事例と研究者の視点による事例をもとに明らかにした。これにより、K児の遊びには「保育者との思いのやりとり」「クラスとの思いのやりとり」「物を媒介にした人とのやりとり」「目的を媒介にしたクラスとのやりとり」という協同性の芽の育ちの段階がみられた。また、この変化は、K児が安心して遊びに没頭したり協同性の芽を経験したりできるようになることと、クラス集団の遊びの豊かさは関連していることがわかった。さらに、これらの変化には保育者のねらいに基づく援助が必要であることがわかった。本成果については、2022年度の幼児教育実践学会にて発表を行い、研究者のHPに資料を公開した。

#### (3) H園の園文化改善のための研修内容の公開

H園において、研究者松永が、園に適した保育方法の発見・活用のために実施した3年間分の園内研修の中で、特に重要な契機となったと考えられる研修内容を明らかにした。主な研修テ

ーマは、実施した順に「保育の理想像共有」「幼児理解と週案の役割」「行事のねらい再考」「カリキュラム作りのための遊びの歳時記の振り返り」「遊びの環境構成」となっている。研修内容や研修で用いたワークシートなどは、研究者のHPに公開した。

#### (4) 保育実践の記述法の開発

保育者の保育観・子ども観の変化に伴う保育方法の変化による、子どもの遊びや個々の子どもへの影響をとらえるには、つまり、「園文化」の変化をとらえるには、保育実践を比較可能にする記述方法が必須である。エスノメソッドによるエスノグラフィーの作成は、文化を記述する方法の改善や創造と切り離せず、この分野において常に効果的な記述方法を求めて試行錯誤が行われている。

本研究においては、第一に、子どもの物・人・場所・遊び課題との関りを「ネットワーク分析」により描写する試みを行った。詳細は、目白大学総合科学研究紀要 15号（「遊びの質」を可視化する—ネットワーク理論をアクションリサーチに取り入れる意義と方法—）に掲載した。

第二に、「ダッシュボード型環境図マップ記録」として、「ゲシュタルトとしての集団」、「多様な解釈が可能な個」、「保育者の時間を超えた原因—結果意識」をとらえる記述方法を試みている。2023年度以降の学術論文掲載を目指す。

#### (5) 最後に

エスノメソッドは、仮説生成型研究といわれる。研究開始時には、研究者は、幼児理解力が高まれば、保育方法は進化し、その系統の頂上には特定の保育方法があるという仮説をもっていた。この仮説は無意識のうちにもっていたものであり、研究の過程をへて自分の無意識に気付かされたものである。しかし、H園の研究を通して、保育実践から立ち上げる理論（カリキュラム、カンファレンス時に使用する共通言語）、道具（環境構成法・記録法）、事例（行動目標）が一体的に働く複数の保育文化圏が自律的に存在しているという仮説を生成するにいたった。

また、「理論」「道具」「事例」の理論的結びつきを考える保育方法論が、転換過程に有効に働くと考えるようになった。保育文化圏を変えるには、幼児理解力だけでは不十分である。幼児理解力もまた、文化圏の影響を受けるからである。

保育を型にはめるイメージのため発展してこなかった保育方法論、特に保育方法論における保育実践研究の領域であるが、保育文化圏内にいる保育者が自分の園を超えて保育を見直す時には、同じ保育方法論をとる園同士の情報交換、保育方法論間の切磋琢磨、新しい保育方法の開発を可能にする保育方法学が必要である。複数の保育方法の特徴の分類、比較、情報交換、切磋琢磨をするための保育方法学の確立は、園文化改善に寄与すると考えられる。

#### 引用文献

1. 松永愛子「「遊びの質」を可視化する：ネットワーク理論をアクションリサーチに取り入れる意義と方法」目白大学総合科学研究 = Mejiro journal of social and natural sciences (15), 39-58 頁.
2. 松永愛子「教師主導型保育から遊びを中心とした保育への転換過程において期待される「保育方法学」の働き」, 『小川博久保育・教育理論集成』ななみ書房, 228-238 頁.
3. 「乳幼児保育における遊びの質に関するエスノメソッドロジー研究」  
<https://aimat1978.wixsite.com/ethnomethod-child/research-projects>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松永愛子	4. 巻 15
2. 論文標題 「遊びの質」を可視化する ネットワーク理論をアクションリサーチに 取り入れる意義と方法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 目白大学総合科学研究紀要	6. 最初と最後の頁 39 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松永愛子 宮武春歌 田辺麻衣
2. 発表標題 認定子ども園星の子幼稚園の遊びを中心とした保育への転換プロセス転換4年目：何が変わりつつあるか、何が難しいか
3. 学会等名 ぐうたら村保育セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松永愛子
2. 発表標題 Testing the Value of Visualizing the "Quality of Children's Play" -Incorporating Network Analysis into Action Research-
3. 学会等名 OMEP ASIA Pacific Regional Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松永愛子
2. 発表標題 「遊びの質」を可視化する意義と方法
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松永愛子 上村毅 大徳佳子
2. 発表標題 星の子幼稚園の遊び保育への転換を 園長・保育者・研究者の3視点からとらえる 遊びのとらえ方と環境構成の変化
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松永愛子 河邊貴子 他
2. 発表標題 実践研究へのいざない 質的研究法を問い直す 「エスノグラフィーの可能性」
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会 編集常任委員会シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大徳佳子 松永愛子
2. 発表標題 4歳児の個の育ちと仲間関係の育ち・協同性の芽生え
3. 学会等名 第13回 幼児教育実践学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小笠原喜康・河邊貴子・松永愛子他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ななみ書房	5. 総ページ数 350
3. 書名 小川博久保育・教育理論集成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

乳幼児保育における遊びの質に関する エスノメソドロジー研究  
<https://aimat1978.wixsite.com/ethnomethod-child/research-projects>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河邊 貴子  (KAWABE Takako)  (20320806)	聖心女子大学・現代教養学部・教授    (32631)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------